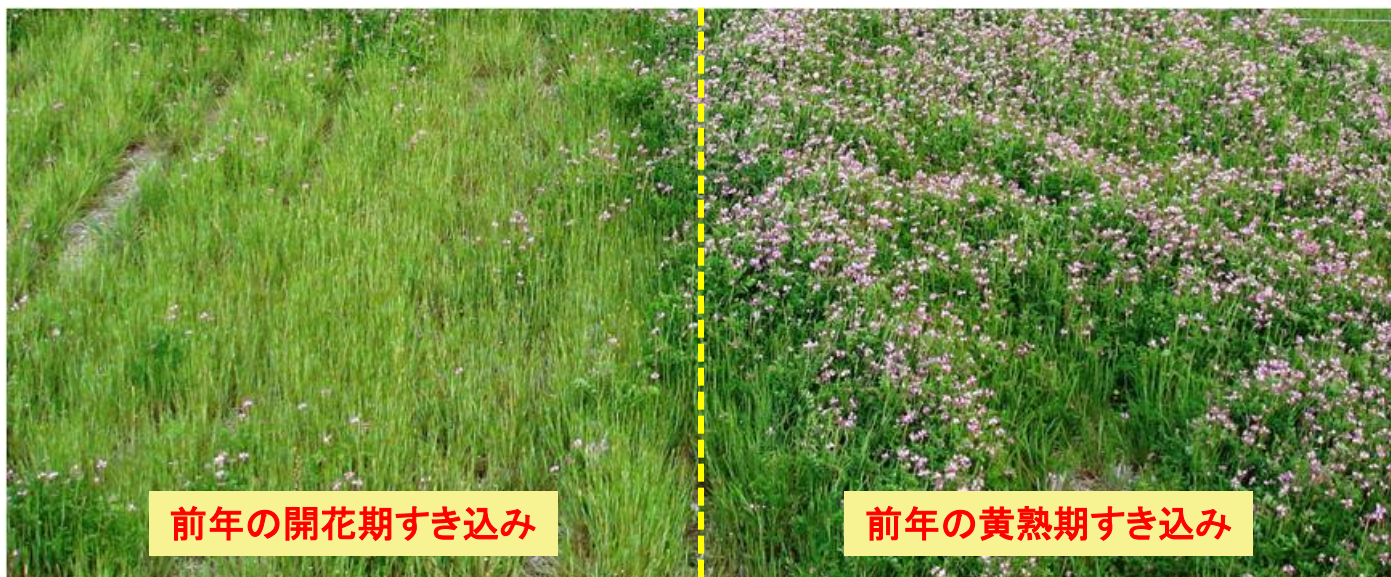


緑肥のレンゲを黄熟期にすき込むと 自然発芽して翌年も利用できる



前年のすき込み時期が異なるレンゲの翌年5月の生育状況

開発のねらい

環境保全型農業では化学肥料の代わりに緑肥であるレンゲの栽培が見直されています。しかし、種子代が高いのが課題です。このため、毎年レンゲ種子を播かなくても、レンゲが自然再生するすき込み時期を明らかにしました。

新技術の概要

- ▶ 岡山県南部では5月上旬から中旬の開花期にレンゲをすき込むと、自然再生はせず、毎年レンゲ種子を播く必要があります。
- ▶ 5月下旬頃、レンゲのさやが黒変し種子が成熟する黄熟期以降にすき込むと、秋に種子が自然発芽し、翌年の緑肥として利用できます。レンゲの種子を毎年播く必要はありません。

活用場面

種子コストの削減により、レンゲが利用しやすくなり、特色あるコメ作りによる産地の活性化が期待できます。また、化学肥料の使用を控えた有機農業や特別栽培などの環境保全型農業の推進につながります。